

牧草麦類同伴栽培について

春の草地更新において、牧草に加え、麦類をは種し、更新初年目の雑草抑制と増収効果が期待できる「牧草麦類同伴栽培」という方法があります。令和3～4年度に宗谷管内地域農業支援会議のプロジェクト活動でも現地試験を行ったので、その結果とともに紹介します。

①牧草麦類同伴栽培とは

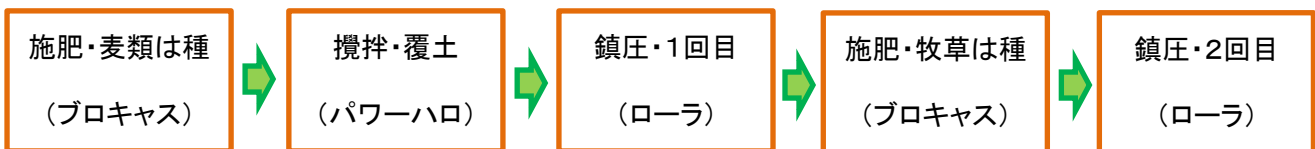
- 春の草地更新における1番草の収量確保と雑草抑制効果が期待できる
- 麦類（エン麦、大麦）のは種量は、3～5kg/10a程度が適量
- は種は5月の早い時期ほど当年収量が多く1番草収穫時期は7月中～下旬（乳熟期）
- 麦類の初期生育を促進させるため、浅く覆土する（覆土深2～3cm）
- 大麦の方がエン麦より多収だが、牧草の生育を抑制する作用が大きい
- 前植生で多年生雑草が優占する場合は、雑草抑制効果は期待できない

・牧草麦類同伴栽培の栽培暦

	5月			6月			7月			8月			9月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
耕起・碎土・整地 施肥は種	エン麦の生育期間 →						1番草収穫								
	牧草の生育期間 →														

②施工方法

碎土整地後の作業工程はつぎの図のとおりです。



ブロードキャスト



パワーハロ



ローラ

③現地試験の結果 ～宗谷管内地域農業支援会議プロジェクト活動～

令和3年に猿払村浅茅野地区で実施した試験の結果について記します。

は種は、令和3年5月27日で、チモシー主体の牧草種子にエン麦 3kg/10a を加え実施しました。また、施工方法は、②施工方法のとおり、パワーハコによる覆土実施区（覆土深2～3cm）と、この工程を省いた覆土無区を設置して比較しました。

は種後、64日目の収量調査では、いずれの区も春は種の1番草の標準的収量である800kg/10a を大きく上回り多収となりました。しかし覆土無区は、収量に占める雑草の割合が4割以上となり、エン麦による雑草抑制効果が発揮されませんでした（写真1、表1）。

さらに、同年11月30日に実施した越冬前植生調査では、覆土実施区で牧草割合が7割を超え覆土無区より良好な結果となりました。また、エン麦の再生は見られませんでした（表2）。



写真1 収量調査時の試験ほ場の写真

破線より左側の覆土実施区は、出穂したエン麦が優占しているが、右の覆土無区はエン麦が少なく、シロザが多くを占めていました。

表1 収量調査結果（は種後64日 令和3年7月30日）

試験区名	収量 (kg/10a)	重量比(%) * 裸地を除き重量比で算出			
		牧草		雑草	裸地
		エン麦	チモシー		
覆土実施区	1,429	44.0	2.0	24.0	30.0
覆土無区	2,241	21.7	0.5	42.8	35.0

表2 越冬前植生調査（令和3年11月30日）

試験区名	冠部被度(%)					判定区分
	牧草			雑草	裸地	
	エン麦	チモシー	クローバ			
覆土実施区	0.0	70.0	2.0	23.0	5.0	◎
覆土無区	0.0	56.7	0.0	35.0	8.3	○

*判定区分：◎牧草優占（牧草割合70%以上）○牧草主体（同50～70%）

*まとめ

春の草地更新で牧草麦類同伴栽培を行うことにより、1番草収量の向上と雑草抑制効果が期待できます。このメリットを得るためには、麦類に浅く覆土（覆土深2～3cm）を行う必要があります。また、留意点として、前植生において多年生雑草が優占している場合は、雑草抑制効果が期待できないとされているので、ほ場の選定が重要です。

（作成：令和5年4月 宗谷農業改良普及センター）